

伊藤千代子の歩んだ道

伊藤千代子の墓碑と顕彰碑のある丘に登れば、諏訪湖とその周辺に広がる一帯（諏訪盆地の西半分）を展望することができます。この地が18歳までを過ごした千代子の故郷です。

当時の長野県諏訪地方は、国内有数の生糸生産地として製糸業が活況を呈していました。農村から供給される繭と若い労働力としての工女が、生糸製糸業を支えていました。

千代子は1905年（明治38年）7月21日、長野県諏訪郡湖南村（現・諏訪市）真志野に生まれました。ちょうど日露戦争が終結し、中央線が岡谷まで開通した年でした。

幼くして母と死別、祖父母の援助で諏訪高等女学校（現諏訪二葉高校）に学びました。

高島小学校の代用教員の後、仙台尚絅女学校に学び、その後、東京女子大へと進学しました。

千代子は常に生活に苦しむ人々に心を寄せ、世の中の矛盾と不公平さを許せず積極的に活動しました。

千代子の生きた時代は「反戦・平和・働く者の権利・生きる権利」を訴えただけで逮捕投獄される時代でした。

1928年（昭和3年）3月15日、治安維持法により特高警察に逮捕され、獄中での凶暴な拷問や虐待にも屈せずたたかい続けましたが、ついに倒れ1929年（昭和4年）9月24日、24歳の若さで短い生涯を閉じました。

戦争に向かう暗黒の時代に
権力に抗して
声を上げた
乙女がいた――

土屋文明

千代子が諏訪高等女学校の3年生の時、校長であった歌人土屋文明は千代子の死後、その死を知り3首の句を歌いました。

まをとめのただ素直にて行きにしを
囚へられ獄に死にき五年がほどに

ころざしつ つたふれし少女よ
新しき 光の中に置きて思はむ

高き世を

ただ目ざす処女らここに見れば
伊藤千代子がことぞかなしき



ここでは今地シバリの花ざかりです・・・
命あるものはみんなあらんかぎりに
生きようとしているのですね。
生きようとするからこそ、
その大切な命を投げ出すのですね
――千代子獄中からの最後の手紙より――

伊藤千代子
没後95年

劇映画

わが青春つきるとも

――伊藤千代子の生涯――

字幕版

上映日時 2024年9月23日（月・祝日）

14:00開演（13:30開場）

※上映時間は2時間10分です

会場 諏訪市文化センター 大ホール

入場料 一般 ¥1,000 大学生 ¥500 高校生以下 無料

※前売券の販売はございません。入場時にお支払いください。

主催 伊藤千代子ころざしの会
諏訪地域上映実行委員会

お問合せ 090(4022)7608
実行委員会（藤森 守）